黙示録の記録

第２１章

地上にある天国

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

第21章　地球にある天国（天の都）

長い年月、無益な出来事が世界を支配しているように思われてきました。毎年毎年、希望の新年は瞬く間に挫折と敗北の年となります。定期的になされる、さらによりよくとの決意は、決まって破られます。もし創造主が世界と人類に目的をお持ちなら、創造主は失敗しているか忘れているかで、物事は年を追って悪くなっているように思われます。

しかし、創造主は全知全能で失敗はありえない方です。創造主は長く耐え忍んでおられますが、主の日は来ます。創造主の創造の時点での目的は、被造物のために栄光ある将来をもたらす事にあったのです。遅かれ早かれその目的は成就されるに違いありません。

ついに執行猶予と試験と裁きの時代は終わります。摂理の道のりを走り終え、「時がついに満ちる」（エペソ一章10節）摂理の時が来ます。啓示の書（黙示録）の素晴らしいクライマックスがまさに紐解かれようとしています。実際に、創造主の全啓示の、また創造におけるあらゆる目的のクライマックスです。聖書の最も栄光に富んだ章は最後のこの二つの章です。永遠に続く終わりのない時代の驚くべき幕開けと創造主の愛を基

調とした大計画すべての成就が記されています。

創造主の幕屋

今や古いものは過ぎ去り、すべては新しくなりました。地も新しいし、天も新しい。新しいエルサレムがあります。そして、実際に、すべてが新しいのです（5節）。初めにすべてを創造され、次いですべてのものの創造と組み立ての業を休まれた創造主はもう一度大いなる創造の御業に着手されます。「見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地とを創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。」（イザヤ65章17、18節）

黙示録21章1節　わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。

昔、マタイ24章35節で、イエス様が預言されたように、最初の地球と大気を持つ地球の天は遂に過ぎ去ります。火で焼き尽くすような大激変が最初の宇宙の諸元素を溶かし去りました（Ⅱペテロ3章10節）。しかし、

創造主は新しい天と地とが来ると約束されました（Ⅱペテロ3章13節）。そこには完全に義なる者が住むはずです。さらに、最初に創造された（創世記2章3とイザヤ65章17節，66章22節を比較せよ）と同じように造られるはずの天と地とは決して過ぎ去ることはないのです。「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、―主の御告げ。―あなた方の子孫と、あなた方の名もいつまでも続く。」（イザヤ66章22節）

旧約聖書と新約聖書の文章の中に出て来る「新しい」ということばは「別の存在に関しての新しさ」というより「新鮮さ」を意味しています。「新しい天と新しい地」を適切に訳すと「新鮮な天と新鮮な地」になります。新しい宇宙は別の宇宙ではありません。それは新しくされた宇宙です。まさに原初のようです。それまでの長い崩壊をともなう破壊行為すべてが拭い去られ、宇宙が新鮮で再び新しくされています。普遍的崩壊とは逆のこの完全にする過程は、その遂行のために創造主の独創と造形力の両方が必要なのです。

最初の天と地は、まさに呪いに縛られた諸元素を持ち、罪に汚染されていました。これらが完全に清められる唯一の方法は、完全に新たにされる事だけでした。「天の万象」は解体し燃えさかる火で溶け去らなくてはなりません（Ⅱペテロ3章10～12節）。しかし、質量エネルギー保存の原理に基づいて、罪の結果と証拠はすべて失われますが、それ以外に失われるものは何もないのです。まず、地上の物質は水蒸気に、または、さらに純粋なエネルギーに変換されます。その後で、もうひとたび創造主は創造と統合の素晴らしい力を働かせ、いわば、古い天と古い地の灰燼の中から新天新地が出現するのです。

創造主がご自身の目的達成において何一つ失敗し得ないことを、人々はしばしば忘れています。また、創造主は原初の創造の業のどの面に関しても気軽に変えられる方ではありません。創造の各々の区分は「非常

によかった」（創世記1章31節）のです。それは、創造の摂理において特別な機能を果たそうとの意図が最初からあったからです。罪によって引き起こされた長い妨害にもかかわらず、密かに私たちのために最初の創造でよかったすべてが新しい創造で回復されるか、さもなければさらによい何物かが代わりに用意されるはずです。地球と天とはもう一度あらゆる面で非常によい状態になります。

しかし、最初の地球は、人の保護観察にふさわしい状態にある程度デザインされていたのに対して、新しい地球は人が欠陥のない完璧な状態で歩むのにふさわしく整えられています。したがって、多くの類似性があるとはいえ重大な変化があり、その最も明らかな変化は、そこにはもはや海がないのです。現在、地球のおおよそ70％が海で覆われています。現在より遥かに小さい範囲ですが、ノアの洪水前や至福千年期の地球でさえ、海は重要な「特徴ある地形」でした（創世記1章9、10節、ゼカリヤ14章8節）。しかし、新しい地球の表面は、全地球が人の住める陸地からなっています。

新しい地球に目立つ海がないことの説明は与えられていません。そこで、ある註解者はこの声明は、新しい海がないと仮定する必要はなく、新しい天と新しい地球に調和して、最初の海が過ぎ去ることに関する言及に過ぎないと言います。しかし、本文をもっと自然に読むと実際に新しい地球ですけれども、その地球には海がないのです。

事実、新しい地球は海を必要としないのです。現在の海は、原初の洪水前の海が必要であったように必要なのです。海は、水の循環を維持するための基本的貯水槽として、また地上の動物や人の水に基づく生態系と生理機能維持のために必要です。しかし、新しい地球には動物はまったくいないし、おそらくそこに住む人々は男も女もみな水を必要としない栄化された身体になっているのです。彼らの甦ったからだはイエス・キリ

ストのからだと同じように肉と骨（ルカ24章39節、ピリピ3章21節）からなっていますが、現在のように身体の老廃物を取り除き綺麗にするために役立つ血（Ⅰコリント15章50節）を必要としないのです。このことは現在地上で必要な水がいらなくなることを意味します。地上の水の主な必要性（血液はほぼ90％が水で、人の肉体は、現在65％の水から成っています）が無くなります。

私たちが知り得る限り、液体の水がこんなにもたくさんある惑星は宇宙のどこにもありません。今私たちが知っているように地球だけが生物がいのちを保つのに適した「水の惑星」なのです。それゆえ、海は、恐らく創造主の宇宙経済の標準ではなく、海を最早必要としなくなった時、地球の海は取り除かれます。

それにもかかわらず、新しい地球に水があり（黙示録22章1，2節）、今の時代の水は新しい地球の型であり予言に過ぎません。その水は永遠のいのちの水です。

黙示録21章2節　私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて（用意をととのえて）、創造主のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

一章以来ヨハネは自分自身のことに言及してはいませんでした。眼前に繰り広げられているのがあまりにも驚くべき栄光に富んでいて信じ難い光景なので、使徒たちのうち最後の使徒である彼自身が、実際に起こっているその状況を驚嘆して見ていたと強調しなければならないほどでした。

新しい地球は新しい天と共に完全に準備されていました。今、ヨハネは、天から下って来つつある創造主の都、あらゆる美で装われた完全かつ荘大な都を見ています。新しいエルサレムは、一般の人が「天国に行く」と言うときに意味していることばですが、聖なる都は「天」にはないのです。むしろ天から降って来ます。この文脈では、天は、新しいエルサレムを造られた同じ創造主によって新しく造られた地球を取り巻く大気をさしているだけです。

旧エルサレムでさえ「**聖なる都**」（マタイ4章5節、27章53節、黙示録11章2節、ネヘミヤ11章1節、イザヤ52章1節、ダニエル9章24節）と呼ばれてきました。たとえその民の行いが時々聖でないとしても、「聖」という用語は、ただ、創造主がご自身の大いなる目的のために特別に分けられた（聖別された）都であることを意味しています。もちろん、新しいエルサレムでは、都が聖であるだけでなくその住民もみな同じように聖なる存在です（黙示録20章6設、22章11節）。

黙示録に関する多くの著者は、新しいエルサレムのこの素晴らしい光景をある程度霊的に解釈しようとしてきました。しかし、我々が、イエス・キリストが遠い天（ヨハネ14章2，3節）で準備し、最終的に新しい地球にキリストと共にもたらされる実在の場所としての新しいエルサレムを文字通りに受け取るべきでないとする理由はありません。アブラハムは「**ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神（創造主）である。**」（ヘブル11章10節）。また、それは「御言葉を信じ創造主の御心に従う信仰を持つ人々のために創造主が準備された都です（ヘブル11章16節）。それは「生ける神（創造主）の都、天にあるエルサレム」であり、そこで、ある日天に登録されている長子たちの教会、大いなる復活で完全にされている霊を持つ義人全てが共に集まります（ヘブル12章22，23節）。「**上なるエルサレムは、・・・わたしたちすべての母です**」（ガラテヤ4章26節）。「**この地上には、永遠の都はない。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである**」（ヘブル13章14節）。

現代の科学主義の常識の中にあって、聖書に書かれている通りに、宇宙のどこかかけ離れたところに、キリストが現在建てあげつつある型破りの大きな都があることを、その通り受け取り信じることは困難かも知れません。キリストを救い主として信じ受け入れて死んだ人々の霊は、みな、この都に行き、そこでキリストが地上に帰られる再臨の時を待っているのです。キリストが帰って来られる時、聖なる都を一緒に伴い、地球大気圏のはるか高いところに設置し、おそらく、地球を取り巻く軌道に乗ります。そこに、ヨハネが黙示録でしばしば言及しているようにキリストの裁きの座が聖なる宮と祭壇と共に設置されるでしょう。復活した聖徒たちと携挙された聖徒たちは、患難時代や至福千年期の間たまたま地球を訪問するでしょうが、この都に住むでしょう。最後に、創造主のどのような呪いも裁きの結果もこれ以上決して受けることのない地球が再び新しく造られる時、主イエス・キリストがこの都を地球に携え下ります。そして、都は地上に永遠に留まるのです。

われを忘れて見つめていたヨハネにとって、都は結婚のために着飾った光り輝く白い衣を身にまとった美しい花嫁のように思われました。事実ある意味で、都はそこに住んでいる聖徒たちすべてのゆえにこのように擬人化された花嫁でもありました。これらの聖徒たちは小羊（イエス・キリスト）の永遠の花嫁なのです。

都は、創造主ご自身によって完全に「用意され」（Greek hetoimazo）ていました。このことばは、主イエスが弟子たちに語った時に用いられたことばと同じです。「あなたがたのために、わたしは場所を用意しに行くのだから。」（ヨハネ14章2節）。また、ヘブル書11章16節には、「創造主は彼らのために都を用意しておられました」と記されています。使徒パウロが選んだ驚くべき約束の言葉は実に見事です。「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、創造主はご自分を愛する者たちのために備えられた」（コリント2章9節）とありますが、まさにその通りです。

黙示録21章3節　そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神（創造主）の幕屋が人とともにある。神（創造主）は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神（創造主）ご自身が彼らとともにおられて、

もう一度天から叫ぶ大声があり、勝利と祝福の言葉が伝えられます。ずっと昔イスラエルの子たちになされた約束が鳴り響き。「わたしはあなたがたの間にわたしの住まいを建てよう。わたしはあなたがたを忌みきらわない。わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの創造主となり、あなたがたはわたしの民となる。」（レビ26章11、12節）との天からの宣言が鳴り響いています。もちろん、荒野の幕屋はいま地上に下ってきた栄光に富む幕屋のほんのわずかな陰に過ぎません。同じ様な約束はいろいろな時にさまざまな方法でなされた。たとえば、「その日、多くの国々が主につき、彼らはわたしの民となり、わたしはあなたのただ中に住む。あなたは、万軍の主が私をあなたに遣わされたことを知ろう。」（ゼカリヤ2章11節）。事実キリストの偉大な予言の名インマヌエルは、「創造主が私たちと共におられる」（マタイ1章23節）という意味です。

そこには「多くの国民」がいるが、すべて「わたしの民」であり、創造主は「彼らの創造主」になります。さらに、すべての国民はもうひとたび同じ言葉を話します。「そのとき［すなわち、全地が創造主の「ねたみの火」で焼き尽くされた後］、わたしは、国々の民のくちびるを変えてきよくする。彼らはみな主の御名によって祈り、一つになって主に仕える」（ゼパニヤ3章8、9節）とある通りです。

このやがてくる創造主と人とが一つに結び合わせられる大結合については、その兆候があらかじめ他に示されていた。創造主が初めて人となられた時に、「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」（ヨハネ1章14節）。「住まわれた」ということばは、ギリシャ語でスケヌー skenoo で、このことばは「住む」という一般的ことばではなく、黙示録21章3節で用いられているのと同じことばです。それはこの3節でも用いられた「幕屋」（ギリシャ語スケネ skene）ということばに直接由来しています。言い換えると、創造主が肉体を取られた時、永遠の創造主は一時的に人々の間に仮に住まわれて、それから天に帰られた。しかし、来るべき永遠の時代には、創造主はご自身のお住まいを地上に設立し、ここを永遠の住まいとされるのです。

旧約聖書の「幕屋」（ヘブル語ミシュカン mishkan）ということばは、ギリシャ語のスケネ skene と同義語で同系言語です。幕屋を満たした栄光の雲に対し用いられたことでよく知られた用語シェキナ（the Shekinah 顕現）は、「住まい」（申命記12章5節）を意味する seken に由来しています。こうして創造主がご自身の民と住まわれるという考えは、そのまま彼らのまん中にある創造主の栄光という考えに結びついています。ことばが「私たちの間に住まわれた」（ヨハネ1章14節）時、ヨハネは「私たちは主の栄光を見た」と言っています。

黙示録21章4節　彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

天からの大声がかつて聞いたことのない最も祝福されたメッセージの一つを続けます。エバがはじめて罪を犯した時から、悲しみはその子たちに増し加わり（創世記3章16節）、「人は生まれると苦しみに会う。火花が

上に飛ぶように」（ヨブ5章7節）。しかし、涙は人のために良いもので、創造主はいつの日か世界に喜びと平和を回復すると初めから約束しておられます。「永久に死を滅ぼされる。創造主である主はすべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。主が語られたのだ。その日、人は言う。『見よ。この方こそ、私たちが救いを待ち望んだ私たちの創造主。この方こそ、私たちが待ち望んだ主。その御救いを楽しみ喜ぼう。』」（イザヤ25章8、9節）

遂に、大いなる日がやってきます。もはや涙することは決してない。特に、患難期に苦しみにあった聖徒たちにとって、この約束は大きな慰めになっているのです（黙示録7章17節）。

これは、まさに大いなる呪いの除去に他なりません。その呪いとはアダムが罪を犯した時（創世記3章17～19節）、地とその住民に対し創造主が宣言された呪いです。呪われた「土地」の諸元素は溶解し、新しい地球が灰の中から起り、清められています。また、人の生涯に及ぼす四重の呪いから全人類を解放するとの宣言がなされています。エデンの園において、人はみな一様に悲しみ、痛み、汗と死を経験すると宣告されましたが、今やその創造主がこれらのことはもはや来ないと宣言しておられるのです。

もちろん、この大いなる救出のために、イエス・キリスト（創造主の御子・人の子）が悲しみ、痛み、汗と死という測り知れない高価な代価を払って人々をサタンの呪いから買い取られたのです。

人はみな聖書にある通り、各々の人生で悲しみを耐えて生きているのです。そのために、創造主は「悲しみの人となり、悲しみを知っていた」のです。そこで、主は「私たちの病を負い、私たちの悲しみをになった」（イザヤ53章3、4節）のです。また人々はとげとアザミという肉体的痛みや人生で苦闘するように彼らを打つため遣わされたサタンの多くの使者に悩まされています（＝コリント12章7節）。そこで、主は茨の冠そのもの

をかぶらせられ（ヨハネ19章2節）、だれも経験したことのないような傷と打ち傷と鞭打ちに耐えられました（イザヤ53章5節）。また、人々は虚無と滅びの束縛の下にあって呪われた不毛の土地からわずかな食糧を得るために激しい労働で汗を流し終わりなき労苦の激しい叫びを必要としたのです（ロマ8章20～22節）。

そこで、主は喜んで血の雫のような大粒の汗を流され（ルカ22章44節）、労し重荷を負って（マタイ11章28節）すべての人を休ませるために激しい叫びと涙を注ぎ出された（ヘブル5章7節）のです。それから、人は、悲しみと痛みと涙で染まったすべての労苦の後で、最後に、肉体は死に、塵に帰ります。そこで、イエス・キリストは彼らの代わりに「死の塵」をご自身で経験し（詩篇22章15節）、ご自身の魂を罪の捧げ物とし（イザヤ53章10節）、死にいたるまで魂を注ぎ出されました。（イザヤ53章12節）。

キリストは呪いを負われただけでなく、われわれのために呪われたものとなられた（ガラテヤ3章13節）のです。それゆえ、全く義なる創造主は、呪いを永遠に取り除くことが出来たのです（黙示録22章3節）。世界中の人々で、全世代を通して、誰一人これから後再び死ぬ者はいません。これから後、痛み、悲しみ、涙する者は誰もなく、死は勝利に飲み込まれています。最初の天と最初の地球のように、以前あったこれらすべてのものは過ぎ去ったのです。

黙示録21章5節　すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である」。

「創造主が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物が改まる時［口語訳聖書で「万

物更新の時」と訳されたギリシャ語apocatastasis」（使徒3章21節）］が遂にきたのです。新しい天・新しい地と新しいエルサレムがあるだけでなく、新しい歌（黙示録5章9節）と新しい名（黙示録2章17、3章12節）があります。事実、すべてのものが新しく造られているはずで、この約束は真実であり信頼できることを創造主御自身が私たちに保証しておられます。

恐らく、このことはすべてが新しく造られるだけでなく、その後、すべてのものは新しい状態に留まることを意味します。エントロピーの法則は廃止されます。何物もすり減らしたり朽ちたりするものはなく、だれ一人年を取り老衰する者もいません。すべての樹は豊かに永遠に実を稔らせます（黙示録22章2節）。照明や他の働きに前もって用意された限られたエネルギー供給源が使い尽されることもないのです（黙示録22章5節）。すべてのものは存在し、ちょうど彼らが創造の週にあったように、永遠に若く新鮮な、新しい状態に留まります。

この素晴らしい約束を施行する権限を持つ方は王座に着かれたキリストに他なりません。キリストは天の都にある王座と共に新しい地球にあるご自身の永久の住まいに下って来られます。甦り栄化された聖徒の新しい身体について言えば、これらも永遠に強く健康な状態に留まります。聖書はこの点に関して、はっきり述べてはいませんが、少なくとも甦った身体に関しては、男女共に各々の見かけ上の年齢は、30代前半を暗に示している可能性があります。アダムとエバが創造された時、彼らは子供を育てることの出来る成長した大人でした。老化と死は罪の結果の一つの現れなのですから、もし罪を犯さなかったなら、彼らは、創造された時と同じ年齢に留まっていたはずです。しかし、同時に、彼らは子供を生むように命じられていたのです（創世記1章28節）。そして、これらのことは、アダムとエバの地上での年月は実際にそれほど経っていな

いのに、いわば、彼らは十分に成人し子を産み育てることの出来る安定した状態に創られたのは確かです。

また、祭司やレビ人として幕屋に仕えて奉仕する人々は、30歳またはそれ以上の年齢（民数記4章3節）でなければならなかったことも重要に思われます。エジプトの宰相となった時、ヨセフは30歳でした（創世記41章43節）。そうして、創造主のみ心にかなった人ダビデは30歳でイスラエルの王となりました（Ⅱサムエル5章4節）。復活した人々は、また、至福千年期（黙示録20章6節）に、祭司や王として奉仕するのですから、彼らの復活した身体の年齢はこれと同じく30才位のはずです。

主イエス・キリストでさえ公生涯に入られたのが30歳でした（ルカ3章23節）。そして、十字架に架かられたのが僅か3年半くらい後でした。イエス・キリストの復活の身体は見たところ同じくらいの年齢で、栄化されて異なっていましたが、なお容易に認められる状態だったことは大切です。もちろん、聖書は、また、キリストが身体を持って再び来られる時、キリストに在る者は「ご自身の栄光の身体と同じ姿に（ピリピ3章21節）」「キリストのようになる」と教えています。

それゆえ、聖書に明瞭には教えられているわけではありませんが、復活に当たって、年を取って死んだ人々は再び最も活気のあった若い時と同じ位の年齢になることでしょうし、幼児期または若くして死んだ人々は完全に成長し十分に発達した身体の状態になっていることでしょう。いずれにしても、主のことばは真実で信頼に足るものですから、すべてのものは新しくされるのです。

黙示録21章6節　また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。

キリストは新たにされた名をアルファーでありオメガーである方（黙示録1章8、11節、22章13節を見よ）・創造者であり完成者・初めであり終わりである方としてご自分を紹介していて、ヨハネに語りかけている方は、栄化されたキリストご自身にほかなりません。丁度創造のみ業が終わって（創世記2章1～3節）、ついで、贖いのみ業も完了した（ヨハネ19章30節）ように、今や目的達成と回復のみ業は完了しているのです。

それから、主は在世中にされた約束に言及しています。ヨハネは主ご自身がサマリヤの井戸の傍らで話されたことを記していました。「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」（ヨハネ4章14節）。それから後、主は言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っている通りに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。（これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである）」（ヨハネ7章37～39節）。

この「いのちの水」は、キリストを信じるすべての人に主が与える永遠のいのちを持つ聖霊の象徴でもあり、聖なる都を流れる美しい川にある光り輝くきれいで豊かな文字通りの水（黙示録22章1節）をも象徴しています。すべてを新しく造って、すべてを供給される創造主は、新しく創造したいのちの木の実といのちの水の川（黙示録22章1、2節）によって栄化された聖徒の身体を永遠の健康と力ある状態に保ちます。

黙示録21章7節　勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の創造主となり、彼はわたし

の子となる。

黙示録2章3章にある七つの教会の各々に対して、その教会にいる「勝利を得る者」のために前もって素晴らしい約束が与えられていました。今や8番目で最後の約束が「勝利を得る者」に与えられます。世界中のすべての真の教会に属する勝利を得る者すべては、復活し新しい地球にて、最終的に創造主が約束された全てを受け継ぐのです。これは、この聖句が暗に保証していることです。彼らは総てのものを受け継ぎます。そして、もちろんのこと、これはキリスト御自身が「総てのものの相続者」（ヘブル1章2、詩2章8節）だからであり、イエス・キリストにある人々は「キリストとの共同相続人」（ロマ　8章17節）なのです。そして、「朽ちることも汚れることも、消えていくこともない、あなたがたのために天にたくわえてある資産・・、あなた方は、信仰により、創造主のみ力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救い」（1ペテロ1章4、5節）を受けるのです。

相続関係はまた子との関係をも示します。「私たちが創造主の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは創造主の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」（ロマ8章16、17節）。勝利を得る者（すなわち、救い主として主としてキリストを信じ贖われたすべての真の信者）は、力ある創造主の息子と相続者の両方になります。それゆえ、「すべては、あなたがたのものです。・・世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです。そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは創造主のものです。」

（1コリント3章21～23節）

なんと素晴らしい相続でしょうか！　キリストを信じる者の将来は、時間的にも空間的にも制限はないのです。制約がない空間と終わりがない時間からなる宇宙自体の測り知れない資源は、いついつまでも勝利を得た者のものです。

黙示録21章8節　しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

贖われた者に対する素晴らしい約束と対照をなして、主は、恐れと不信のゆえに、人を殺す者、売春に関わる者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者ども人殺し、不品行の者、偶像礼拝を悔い改めない者、全て偽りを言う者で、許されない状態に留まっている人々に対する警告が挿入されています。彼らは恐ろしい火の池で永遠の苦しみ、第二の死（黙示録20章14、15節）を永遠に過ごします。

これは聖書に出てくる「火」に関する言及の最後です。それは実に永遠の地獄・燃えさかる硫黄の火の池についての言及で、それこそ最後の永遠の地獄です。「火」に関する聖書の最初の言及は、創世記19章24節にあり、「火と硫黄」が天から降り注ぐのが観られ、ソドムとゴモラの低地すべてを地獄の前触れとでも言うべき火の池に変えたのです（創世記19章24節）。キリストは恵みだけでなく裁きにおいても最初であり最後である方です。

地獄に住んでいる罪人のここに記された目録は生き生きしていて最も教訓的です。目録の最初に出てくるのは「おくびょうな者（恐れる者）」です。これはもともと肉体的に恐れる（臆病）と言うことではなく、むしろキリストを信じる信仰の欠如に言及したことばです。キリストはマルコの福音書4章40節で、「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」で用いている言葉です。もっとぴったり当てはまるのは「あなた方は心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」とヨハネの福音書14章27節に用いられている言葉です。同じ様にテモテへの手紙第二1章7、8節に「創造主が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、創造主の力によって、福音のために私と苦しみをともにしてください。」とあります。キリストより人の非難を恐れる人々は、危ないことにこの種類の罪と結び付いているのです。

恐れというこの種の罪は、目録の次に挙げられている不信仰の罪と全く同じです。それは信じないと言う罪に過ぎませんが、信じないと言うことはおくびょう（恐れ）の外部に対する現われで、それが実際に人々を地獄に追いやるのです。「御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。それは創造主のひとり子の御名を信じなかったからである」（ヨハネ3章18節）。

次に挙げられている一見より不快に思われる罪は実際には不信の罪ほど深刻ではありません。真の回心と信仰があるなら、人殺しでさえ真の悔い改めと信仰さえあれば許されますが、信じない者には救いがないのです。道徳的正しさに尺度はなく、誰一人絶対的完全さには足りず、この不足を埋め合わせることは永遠に出来ません。あらゆる罪のうち最も大きな罪は、私たちの罪を贖うためになされたキリストの私たちへの無

限の愛と身代わりの死を拒絶することです。

「憎むべき者」とは、偶像崇拝と結びついた冒涜的で不道徳な創造主が憎むことを行う人々です。用語「人を殺す者」は殺人に対してではなく犯罪的謀り事を用いて人を殺すことに対する言及です。次は、「不品行の者」（売春の仲介者、ギリシャ語 pornos）で他のくだり（節）では「姦淫」と訳しています。ついでながら、不品行の者とは結婚以外の性的活動を行うまたは奨励する者についての言及です。

前に述べたように（黙示録9章21節）、「魔術を行なう者」（ギリシャ語 pharmakeus）とは、宗教まがいの幻想やオカルト体験（訳者注／コックリさん・口寄せ・霊媒等）を引き出すために薬を用いる者です。その用語が偶像崇拝者と結びついていると言うのは的を射た表現です。偶像崇拝者の宗教的礼拝の対象は物質に向けられ、順次、彼を悪霊か宗教的または哲学的概念かに向け、ある種の霊的現実味を現すのです。聖書のいくつかの箇所（エペソ5章5、コロサイ3章5節）は、むさぼり（物質所有に対する過剰な愛着）さえ偶像礼拝であると明らかに述べています。

最後に、「すべて偽りを言う者」が有罪と判定された者の名簿に入れられています。サタン自身偽りの父（ヨハネ8章44節）だからです。だます者と偽りを言う者特に偽りの教師たち（Ⅱペテロ2章1～3、ユダ4章13節）は、最後に火の池にいる彼らの極悪非道の父に加わらねばなりません。

自分自身をここに記されたような極悪非道の罪人と認めたい人はほとんどいないでしょう。しかし、偶像崇拝は他人の者をむやみにほしがるむさぼり（コロサイ3章5節）を含み、姦淫は情欲をいだいて女を見ること（マタイ5章28節）をも含み、そして、人殺しは人に対し腹を立てる者（マタイ5章21、22節）をさえさすことを覚えなくてはなりません。さらに、決して嘘を言ったことのない人、また決しておくびょうになったことのない

人は誰かいるでしょうか？　こういうわけで、この罪人の一覧表は、総ての人を指しています。なぜなら、「すべての人は、罪を犯したので、創造主からの栄誉を受けることができない」（ロマ3章23節）のだからです。

けれども、有罪の決定は、明確に罪を犯して死んだ人々のためであり、また、キリストに留まらないでなお罪の醜い状態が見られる人々に対してです。しかしながら、キリストを受け入れるこのような罪人すべてのためにはキリストにある驚くべき許しがあるのです。「・・・・不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、創造主の国を相続することができません。あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの創造主の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」（Ⅰコリント6章9～11節）。

けれども、まことの創造主であり贖い主である方（イエス・キリスト）を信じない罪のためには許しは有り得ないのです。「御子を持つ者はいのちを持っており、御子を持たない者はいのちを持っていません。」（Ⅰヨハネ5章12節）とある通りなのです。

創造主が完成される都

これらの罪人と彼らに起こった恐るべき裁きは、聖なる都の栄光のさなかに間もなく忘れ去られます。以

前のことどもは過ぎ去り、そして「先のことは覚えられることなく、心に思い起こすことはない」（イザヤ65章17節）のです。もちろん、創造主が造られた聖なる都のもっとも栄光にとんだ面はキリストがそこに居られる。すなわち「私の居るところにあなた方もおらせるためである」（ヨハネ14章3節）という事実にあるのです。「このようにして、私たちは、いつまでも主と共にいることになります」（Ⅰテサロニケ4章17節）。

黙示録21章9節　また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」

今までなされた御使いに関する特別な言及の最後は、千年も前のことでした。その時、ヨハネは、縛りつけられたサタンが千年の間底知れぬ穴に閉じ込められるのを見ていました（黙示録20章1節）。しかし、いま力ある御使いがヨハネに近づき、美しい都についての驚くような紹介をしました。その都に、ヨハネはすべての聖徒と共にいつか住むことになります。

この御使いの名前は定かではありませんが、患難期（黙示録15章1節）の終わりに施行される七つの災害を執行するため創造主により選ばれた七人の御使いの一人とヨハネが認めた天使でした。七つの最後の裁きを実際にもたらすだけでなく、その後、御使いの働きについて六回（黙示録17章1、18章1，21、19章10、17節、21章1節）の言及が見られ、これを入れると七つになることは特別な意味があるのかも知れません。これら七つの最初と最後の天使は、最後の七つの災害をもたらした天使たちの一人と言われています。したがって、お

そらく他の五人も同じく七つの災害をもたらした御使いの一人であったことでしょう。

最初の天使はヨハネに「大淫婦」を見るために「ここに来なさい」と指示しました。最後の御使いも、また、今度は「キリストの妻なる花嫁」を見るために「ここに来なさい」とヨハネに語っています。両方の場合とも、ヨハネは大きな都を見せられました。最初はバビロンであり、二回目はエルサレムでした。バビロンは激しく打ち倒され永遠に姿を消してしまい（黙示録18章21節）、新しいエルサレムが栄光のうちに天から下ってきて、永遠に続くのをヨハネは見たのです。バビロンは霊的にも政治的にも邪悪な巨大組織であり、また、その組織の中心で首都として機能した実在の都市でした。それと同じように、新しいエルサレムは、栄光に富んだ文字通りの都市であり、同時に、創造主の普遍的幕屋であり、永遠に続く際限のない義の王国です。

黙示録21章10節　そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが創造主のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

これら七人の最初の御使いは、御霊に感じたままバビロンを見せるためにヨハネを荒野に連れて行った（黙示録17章1節）のに、最後の御使いはエルサレムを見せるために大きな高い山に連れて行きました。最初の場合、ヨハネはノアの洪水の結果もたらされたと思われる地球規模の荒廃の中に、まさにその始めからバベルの塔にいたるまで観察するために時間を遡らされていました。今度は、ヨハネは御霊に感じたまま、天にも届くかと思われるような非常に高い山に移されたようです。観察に有利な場所は、実際に、都の中には有りません。彼は、以前、天にある創造主の御前に携え挙げられる特権に与（あづか）っていました（黙示録4章1節）。ヨハネはまたそ

の高く挙げられた所から、天と地に起こる出来事を見ました。そこはおそらく天の都のどこかでした。それは、その都が、大患難と至福千年期の間、大気上空の高いところに漂い留まっていたからです。

けれども、今、ヨハネは都の外のどこかにいるのです。都の構造全体を観察するために、しかも、その美しい都の完成状況を細部にわたって記録できるくらいの近さだったのです。この章の始めの2節で、ヨハネは新しい地球に下ってきた聖なる都について簡単に書き留めています。しかし、このときはかなりの距離から見ていたようです。そこで、ヨハネは新しい地球とそれを取り巻く新しい大気すべての創造を実際に観察できました。今や、その天使は、より近いところに彼を運んで行き、敬虔な思いで栄光の都が彼の眼前を降りながら通り過ぎてゆくのを大いなる驚きをもって見ることが出来ました。

黙示録21章11節　都には創造主の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

聖なる都は他のどの都にも似ていません。人が造った最も大きな都市は、紫と緋をまとい金と宝石で飾った（黙示録17章4節）強力なバビロンでした。一方、新しいエルサレムはきらきら輝く光をまとい、創造主の栄光で輝いています。「主の栄光」が、古代の幕屋（出エジプト40章34節）とソロモンの宮（II歴代5章14節）に満ちていました。主イエスが我々のうちに住まわれた時、主の栄光が異なった状態で現れました「**私たちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた**」（ヨハネ1章14節）。今や、終わりで永遠に、創造主の幕屋が人とともにあり〈3節〉、そして創造主御自身の御代が続く限り、栄

光ある主のご臨在が霊的にも物理的にも新しいエルサレムを照らし続けます。

都の様子は筆舌に言い表せないほど栄光に富んだものです。ヨハネはただ非常に高価な碧玉〈黙示録４章３〉と比べることしか出来ません。きらきら輝く光は「水晶のように輝いて」いました。また少しあとで、ヨハネはいのちの水の川もまた「水晶のように輝いて」(黙示録２２章１節)いたと記しています。主イエスは、まさに「創造主の栄光の輝き」(ヘブル１章３節)で、「世界の光」(ヨハネ８章１２節)であり、「いける水」(ヨハネ７章３８節)なのです。創造主の都は小羊の花嫁です。花嫁は、やがてきたるべき時のために「夫のために着飾った」(黙示録２１章２節)適切な着物で装わなければなりません。実際に、花嫁は「主イエスを着」(ロマ１３章１４節)なければなりません。主イエスの栄光を共にし、キリストの光を反映し、キリストの臨在を永遠に楽しむのです。

黙示録２１章１２節　都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。

その都が非常に高い山頂にあるヨハネの観察点に近づくにつれて、ヨハネは、透き通った水晶の輝きを通して、都を取り巻いている巨大な城壁が現れてくるのを見ます。明らかに、城壁は、都そのものの高さと同じくらい高く聳えています。しかし、地上の都市とは異なり、城壁は敵から護るためのものではありません。なぜなら門はいつでも開いていて、警戒を要する敵はないのです。確かに、城壁は丈夫さと永遠に安全であることを物語っていますが、恐らく、特筆すべきは、城壁の構造が何にもまさって卓越して美しいことにあるのです

城壁には１２の門があって、門の寸法は記されていませんが、どの高さからでも都に入れるように、門は城壁の高さとほぼ同じくらいの高さまで延びています。最も重要なことは、イスラエルの子たちの名で入口が示されていることです。この事実は、古代イスラエルの創造主を敬う人々がその都の住人であることを保証しており、こうして、天の花嫁である人々の中にこれらの人々も組み込まれているのです。

また、入り口にある名は、わたし達異邦人が最初にこの大家族にそして創造主の都に入れたのは、まず第一に、イスラエルの１２人の息子たちと共にアブラハム、イサク、イスラエルの族長職を通してであったことを永遠に思い出させるのです。「・・子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にいます創造主は、永遠にほむべきかな」(ロマ９章４，５節)と言われたのはイスラエル人についてでした。

さらに、各々の門に絶えず仕えているのは、創造主から遣わされた聖なる天使たちの一人です。勿論、彼らは守護天使ではありません。なぜなら、もはや天使の守護の必要はなく、この天使たちは都に出入りする「救いの相続者」(ヘブル１章１４節)総ての必要にかなう助けをするために遣わされた仕える霊なのです。「天にあるエルサレム」に属している「無数の天使の祝会」(ヘブル１２章２２節)があるので、これは、特に教えられたわけではなく、単なる推論ですが、この美しい都の門に割り当てられたこれらの天にいる仕える天使たちは絶えず交替し、各々の天使は、必要な時は、何時でも何処にでも行って奉仕するように準備していると思われるのです。

黙示録21章13節　東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

おそらく、荒野の幕屋の壁の外側に3部族ずつ宿営していた記念として、門は、四つの城壁の各々に三つずつ、対照的に置かれていました。会見の幕屋の周りで、日の出る方東側にユダ、イッサカルとゼブルン（民数記1章1～9節）が、南側にはルベン、シメオンとガド（民数記2章10～16節）が、西側にはエフライム、マナセとベンジャミン（民数記2章18～24節）が、北側にはダン、アシェルとナフタリ（民数記2章25～31節）が宿営していました。12部族に数えられていないレビ族は、幕屋での奉仕のために、幕屋と他の部族との間、幕屋のすぐ回りに、すなわち、モーセとアロンとアロンの息子たちは東側（民数記3章38節）に、ゲルションは西側（民数記3章23節）に、コハテは南側（民数記3章39節）に、メラリは北側（民数記3章35節）に宿営していました。

列挙されている順序は、千年期の間、エルサレムの城壁にある門につけられた部族の名の順序（エゼキエル48章31～34節）とは異なっています。新しいエルサレムの城壁にある門の順序に関する限り、おそらく日の昇る象徴である東の入り口が、ここで最初に述べられていることを除けば、特別な意味はありません。荒野の幕屋では、モーセと祭司たちは幕屋の東側、そして外側に救い主の出る部族ユダ族が宿営していました。

黙示録21章14節　また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

城壁もまた十二の強固な土台石を持っています。その石は、新しい地球の岩床（最下層の岩）にまで達し、

巨大な城壁の重量を支えています。これは実に「揺るがぬ土台の上に立てられた都」（ヘブル11章10節）であり、その建築者は創造主で、その土台石（基礎）は「とこしえの岩」（イザヤ26章4、マタイ7章24，25節）の上にしっかり支えられています。

土台に彫り込まれた十二使徒の名前は、創造主の小羊（イエス・キリスト）によって買い戻され、創造主の子とされた人々が都に住む確かな保証を与えています。ちょうど、門に書かれたイスラエルの子たちの名が古代イスラエルの救われた人々もそこにいることを請合っているようです。「キリストは私たちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き」（エペソ2章14節）。「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍のものであり、創造主の家族なのである。使徒たちや預言者たちという土台の上に立てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し」（エペソ2章19～21節）ます。生ける信者からなり今聖霊によって建て上げられつつある創造主の霊の宮と、創造主によって天ですぐに用いられるように整えられて、今地球に来つつある幕屋との間にある類似性は明らかで、美しくさえあります。

黙示録21章15節　また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。

もちろん、ヨハネと話ししている方は天使です。その天使は、彼を高い山に連れて行きました。都の途轍もない大きさをヨハネに印象付けるために、天使は、彼の目の前で都の大きさを実際に測り、ほかとは全く

異なる物差しを用いています。それは竿（さお）に似た薄く細い金で出来ていました。同じような竿（さお）が患難時代の聖所を測るのに用いられていました（黙示録11章1節）。両方とも、計測の過程の判断の基準と評価について語っています。背教のエルサレムの場合、聖所とその参拝者は創造主の規格に添い得なかったので、その寸法は記録さえされませんでした。したがって、背教のエルサレムは創造主の懲罰を受けたのです。しかしながら、新しいエルサレムの場合、創造主の完全な最も高い基準を満たすものだったので、すべての寸法が測られ注意深く記載されました。

新しいエルサレムは、人間の理解力を超えるこのような美しい物質、無類の構造、驚くべき大きさからなっています。この都の建築者・製作者が創造主であり、創造主がご自身の言葉で記録してその記録を注意深く保管していた場合を除いて、信じることはまったく不可能なはずです。都は非常に巨大で、その城壁は非常に荘厳で、門は堂々としていて、まったく想像を絶するすばらしさです。それで、ヨハネやわたし達のために、創造主は、さらに、一人の力ある天使にそれを注意深く計測させ輪郭を描かせなくてはなりませんでした。それにしても、都の詳細な計測と描写がありながら、大抵の注解者たちは、なお、記述されているそのままの意味で受け入れるのを拒否し、そのすべてをある種の寓話か比喩にするため、多くの異なった解釈をするための方策を捜し求めています。もちろん、このような方策のすべては、非常に詳細な測量と描写の記述と説明に当惑してもがいています　。

黙示録21章16節　　都は四角で、その長さと幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

天使が都の測量に取り掛かった時、ヨハネは都の設計が正方形であることを直接見ることが出来ました。「四角」という言葉は、ギリシャ語のテトラゴノス（文字通りには「四つの角」で、同じ角度を意味するために用いられる用語。）です。さらに、側面の測量により、その寸法（長さ）が12000スタジオン（すなわち、1スタヂアは600ギリシャフイートでイギリスのほぼ607フイート）で、角度と同様に、長さも同じであることが確認されました。キロメートルに換算すると、都の底辺の寸法は、おのおの2220・42キロメートルの長さになります。

もちろん、このような都市は今まで決してありませんでした。もし、それをアメリカ合衆国に重ね合わせると、カナダからメキシコ湾と大西洋からコロラドにいたる全面積をカバーする大きさに相当します（日本列島の北端稚内から九州南端の鹿児島までを直線にした方形に相当する）。

さらに、都の高さは都の幅と奥行きと同じです。全体として各側面が2220・42キロメートル（1380マイル）の巨大な立方体から成っています。その都は高さがその底辺の長さに等しく、ピラミッドのような形であると、多くの著者は説明しています。このような解釈はまったくのこじつけで、この節のことばをもっと自然にとるなら、長さと幅と高さのすべてが同じ寸法の立方体を意味することがわかります。大昔、このような形は三位一体そのものの属性を示唆する創造主の聖なる臨在と結び合わせて考えられていました。すなわち、基本的宇宙空間の実体は真の三位一体なのです。空間は三次元で構成されなくてはなりませんが、おのおのの次元はすべての空間にゆきわたっています。空間は常に一次元（長さ）に結びついていて、二次元（面積＝長さの二乗）によってはじめて見ることができ、また、立方体すなわち三次元（容積＝3つの長

さの掛け合わせ）で体験できます。同様に、創造主の本質は、父なる創造主に結びついていて、御子イエスで見られ、聖霊で体験されます。

一方、ピラミッドの形（エジプト、メキシコまたは実質的にはすべての古代民族の階段状になった塔のように）は、常に偶像崇拝と結びついていて、ピラミッドの先端（頂点）は、太陽や天の万象を拝むために献納されていたようです。このような建造物の最初はバベルの塔で、それが、単に自然にできた高い丘であっても、ピラミッドまたはジクラートのように人工的に造られた丘であっても、聖書は、高い所（レビ記26章30節）で実行された礼拝を、それが行われた後でいつも非難しています。

立方体は、ソロモンの神殿の聖なる所・至聖所（Ⅰ列王記6章20節）のために創造主により特に定められた形でした。そしてその至聖所にあるケルビムの間に創造主が「住まわれる」ことになっていました。こういうわけで用語からも象徴学の面からもピラミッド形より立方体のほうが好ましいのです。

聖徒の甦った新しい身体は天使のからだの様になり、もはや現在のように重力や電磁力による制約を受けないことも思い出すべきです。こういうわけで、新しいエルサレムでは居住者は水平方向と同様に垂直方向にも容易に移動出来るのです。したがって、都の「大通り」（21節）は、現在の地上の都市のような街路の間にある四角な土地の代わりに、水平の大通りと垂直の通路を持っていて、「各ブロック」は、真の立方体の区画になっているはずです。

このような立体図形は、全期間を通して贖われたすべての人がどのようにして一つの都に住めるかを容易に理解させてくれます。どれくらい多くの人々がそこに居住することになるか詳細に知る方法はありません。しかし、私たちは少なくともあつらえられた大きさを見積もることができます。アダムの時からわれわれの

時代までの全人口は、おおよそ400億人（Biblical Cosmology and Modern Science, by Henry M. Morris, Craig Press, 1969, pp. 72～83を見よ）と計算することが出来ます。それから、至福千年期を通して同数の人が生まれると仮定して、生まれる前または生まれてすぐ死んだ人々がさらに200億人いたとして、過去、現在、未来に亘る人類の成員は男、女、子供を含め1000億人というのが妥当です。

幼児期に死んだ人々を含め、これらの人々の20％が救われたと仮定します。これは明らかに単なる憶測で、これに反して、主イエスは少数の人が救われる（マタイ7章13，14節）ことを明らかにしています。もしこの数字が用いられると、新しいエルサレムは200億人の居住者を収容しなければなりません。また、都の25％がこれら住民のマンション（ヨハネ14章2節）に用いられ、残りの部分75％を街路、公園、公共の建物に割り当てられると仮定すると、各個人に割り当てられる平均の空間（高さ・幅・奥行き）は、30分の1立法マイルになります。

1380（1380）÷ 4（25％）（1、000、000、000）＝30分の1立法マイル

日本人のためにメートルに換算すると以下の通りです。

2220・42（2220・42）÷4（25％）（1、000、000、000）

＝ 0・136840736立方キロメートル （136840736㎥）

すなわち、2220・42㎞の三乗が新しいエルサレムの全容積（10947258958・8立方㎞）になります。その25％がマンション部分（2736814739・7立方㎞）の全容積です。それを新しいエルサレムの人口（200億人）で割ると、一人当たり、136840736㎥となります。

これはおのおのの面が一辺515・3メートルから成る立方体になります。明らかに、聖なる都には、そこに住

むすべての人にとって十分なスペースがあります。大きさを測る他の方法は、一人ひとりに与えられる区画の平均の長さ（または幅と高さ）は、各々の方向に515㍍をやや上回る大きさです。おそらく、ある人にはより大きなある人にはより小さな空間が割り当てられることもあるでしょうが、この数字はほぼ平均の大きさのはずです。

黙示録21章17節　また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキュスあった。これが御使いの尺度でもあった。

人の容姿を帯びているとすれば、測量するに当たって、天使は人が用いている典型的長さに基づく通常の長さのものさしを用います。古代世界では、通常、肘から中指の先端まで（人の前腕の長さ章1キュービットと呼んだ長さ）のものさしを用いて測量するのが常でした。標準化された時、多くの学者たちはこの値をほぼ18インチ（44cm）と認めるようになったと考えられます。おそらく、天使が用いた金の竿は、ヤード尺に等しくほぼ2キュービット（88cm）くらいだったと思われます。

天使はすでに都の城壁の長さと高さとを測量して、そのおのおのが12000スタディオン言い換えると1380マイル（2220・4km）であることが判りました。今、城壁そのものを測り、そして、それが144キュービット、言い換えると厚さで約216フィート（64メートル）ある事を明らかに示しています。かつてそんなに厚い城壁はありませんでした。しかもこの城壁はかって建てられた城壁で最も高い城壁です。そして、その巨大な厚さはその高さに比べて小さすぎるようにさえ思われます。

なにらかの理由で、多くの註解者は144キュービットを城壁の高さを表すと解釈しています。もしそれが高さを表すとするならば、明確に規定された都自体の高さについては意味がなくなります。後者の場合、少なくとも都の高さは都の外側の隅(かど)の構造物の垂直の長さを表しているに違いありません。その場合、特に、保護のための城壁を必要としないのですから、その場合、高さ2220・4kmの構造物の周りを取り巻いている城壁の高さが64メートルでは、何の役にも立ちません。城壁の厚さが64メートルととるほうがはるかに妥当と思われます。

これらの節に繰り返し出てくる12という数字は人目を惹きます。すなわち、12人の天使、12の門、12の土台、12千スタディオン、厚さ12の二乗キュビトの城壁などです。7と同様に12は完全さを、特に、全体として相働いて一つの完全な状態になる管理上の小区分に関する完全さを表しているように思われます。

黙示録21章18節　その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。

城壁の大寸法はあきれるほどですが、組み立て材料はさらに驚嘆に値するものです。巨大な城壁の全構造(構造章新約聖書ではここにだけ出てくる用語）は、美しい碧玉から出来ています。碧玉の厳密な性質は確かではありませんが、古代世界ではよく知られていました。その名はもともと他の言語と同様に、ヘブル語（ヤシュペ yashpeh）とギリシャ語（イアスピス iaspis）から翻訳されていますが、素材が何かは今なおはっきりしません。それは大祭司（出エジプト28章20節、39章13節）の胸飾りに付けられており、創造主の園エデン（エゼキエル28章13節）にもあった石の一つです。碧玉が緑玉（黙示録4章3節）や光り輝く水晶（黙示録21章11節）と

また聖書外の資料と併せ考えると、碧玉は、もともと光り輝く白色で、きらめき燃えるような赤と紫の色あいを発する美しい半透明な石であったことを暗示しており。いずれにしても、都の荘厳な城壁は、光り輝く美しいものであることを疑う余地はありません。

城壁よりさらに素晴らしいのは都そのものです。都の建物も街路も金（21節）で出来ています。現在の世界では、金はもっとも高価な金属で、通貨の基準であり、人のあくなき欲望と争いすべての対象の中で最大のものです。けれども、新しいエルサレムでは、街路そのものが金で舗装され、建物は金で塗装されています。最も美しく価値ある金属がいまや最も豊富な金属です。そして、原初のハビラ（創世記2章11、12節）のように「その地の金は、良質」です。天の金は、非常に良くまったく傷がなく、碧玉のようで、すべての面から金色の輝きを放っていて透き通る水晶のようです。この節の「純粋な」とか「透明な」という言葉は、同じギリシャ語（カタロス katharos）で、都を構成している材料に傷のないことを物語っています

黙示録21章19節　都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、

巨大な城壁の下に12の門の間にはめ込まれた12の大きな土台石（V14節）が挿入され、これらの大きな土台石は城壁そのものに似て宝石で出来ています。各々の土台石は、一つの特別な種類の石からなり、明らかにその石はそれ自体ほかの多くの異なる種類の宝石と釣り合いが取られているので、全体として非常に美しい景観を作り出しています。

12の土台石のためには12の異なる宝石の原石があり、そのおのおのの土台石には他の宝石を用いて12使徒（14節）の一人の名前が刻み込まれています。しかし、どの石がどの使徒を指すかを同定する方法は無いように思われます。同様に、大祭司の胸飾り（出エジ28章17～20節）あるいは美しい創造主の園（エゼキエル28章13節）にあった宝石の序列には関係が無いようです。多くの石は二つの場合同じですが（エゼキエルはただ9個の宝石と金を上げています）。6個の石は三つのリストすべてにあります（碧玉、サファイヤ、緑玉、赤縞めのう、緑柱石、黄玉）。このとき特別なパターンも特別な順序で配列されている理由も認められません。

第一の土台石はそれが支える城壁のようで、たぶん、城壁の色合いとは異なる色合いを反映する碧玉からなっています。美しく青色をしたサファイヤは第二の土台石を、第三の土台石は銅色の石で玉髄（ただ聖書にだけ出てくる）です。エメラルド（緑玉）は第二の城壁にある第一の土台石で、あたかも、創造主の御座自体（黙示録4章3節）であるかのように、輝く緑色を反映しています。

黙示録21章20節　第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

赤縞瑪瑙（サルドオニックス）は白を撒き散らした濃い赤い層を持つ一種の縞メノウです（サルドは、古代リデアのサルデス地方に由来）。第六の土台石である赤メノウ、おそらく、緑玉と同じで、石英の変種である玉髄の光り輝く赤い石です。

第三の城壁にはそれぞれ貴かんらん石、緑柱石、トパーズ（黄玉）で出来た三つの土台石があります。貴かんらん石（金の石）はその名の現存する石はありませんが、おそらく何か黄色の色調を持つ宝石であったはずです。緑柱石も黄色い石で、おそらく今日の緑柱石と同じです。同様に、トパーズは黄色の宝石ですが今日その名で認められている石とは異なります。

第四の城壁は緑玉髄、青玉、紫水晶からなる土台石に載っています。緑玉髄（聖書の中でここに一度述べられているだけ）はおそらく金色がかった緑の宝石です。青玉はおそらく藍玉またはトルコ石のような青い石を象徴すると考えらます。最後に、紫水晶は、現在その名で知られている美しい紫色の石と同じです。

これら土台石の詳細は不明ですが、意図的に構成されていることは間違いありません。確かに、ヨハネの記述の狙いは聖なる都の筆舌に尽くしがたい栄光と美しさを私たちに印象付けるためであり、都から流れ出る天的光がその巨大な碧玉で出来た城壁の色合いに透き通った白色光と虹色の光を映し出しています。都の城壁は巨大な光り輝く土台石の上に載っています。その土台石は全能の創造主が創る事のできるありとあらゆる色と最も美しい多くの物質からなっています。

黙示録21章21節　また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

この記述は何をさすか十分に明らかでないとは言え、これら12の入り口（門）は巨大な城壁の高さ全体にわたって上まで延びていて、おそらく、すべての高さから出入り出来る状態になっているように思われます。

門は閉じられることはありません（V25節）。それゆえ、門は実際に城壁の大きなすき間になっているだけです。しかし、各々の門口は、各門の上と脇にある棟飾りで枠組みされていて、一枚の壮大な光り輝く純粋な傷の無い真珠なのです！

多くの階にあるこれらの真珠の門を通って、王の仕事で出入りする聖なる天使や栄化された聖徒の流れが途切れることなく続くでしょう。離れたところの銀河の探検や開発に遣わされていた王の「僕」（黙示録22章3節）の一人が歓び勇んで帰ってくる状況を描写出来ます。長期に亘る不在の後、彼は地球に向かっての長い旅を始めます。光の速度より速いが、ある限られた速度すなわち天使の速度で空間を旅し、彼は銀河に入るとすぐ太陽系に近づきます。地球に近づくにつれその美しさを味わうために速度を落としながら、彼を招き入れる青と緑の柔らかな眺望をもったきれいな惑星をまもなく見るのです。

それから、都を見ます！　もちろん、かなり遠くから都を見なければならないはずです。もちろん、言語に尽くしがたい素晴らしさです。都は非常に大きいので、この方法によらないではその美しさ全体を見ることは出来ません。しかしながら、新しい天の広がり（すなわち新しい大気）の外縁から、その人は都の素晴らしさをおおいに楽しむ事が出来ます。

白い巨大な碧玉の城壁は、なめらかで澄んだ鮮やかな白さと尚ちらちら光る色調で、宝石の土台を持っており、その下辺の広がりに想像を絶する美しい虹を作り出しています。光り輝く真珠の入り口は、土台石と土台石の間にある隔たりを入り口の高さで横切ります。すべての入り口は、大いなる王の使者にお帰りなさいと招いているかのように、全宇宙で最も美しい景観を示しています。

それから城壁に近づくにつれて、おそらく自分自身の住まい（ヨハネ14章2節）に最も近い門と高さに、直接

飛んで行きます。そこで使者は食し、休息し、主に拝謁する準備をします。そこで、結局、彼は報告し、さらに指示を受けます。

広い城壁を通過し門を入ると、都そのものの抜群の美しさが彼の目に留まります。確かに、実にすばらしい立体で網目構造からなる大通で構成された都の「街路」は、どこも最も純粋な金で敷き詰められており、非常に純粋なので透き通るガラスのようです。どうしてこのような事があり得るのでしょうか。私たちには理解できませんが、ヨハネはそれを見て、それがその通りであるとわたし達に請け合っているのです。街路は丈夫で堅固、最も素晴らしい金から出る日光の光のような色合い、それにも拘らず都のどこをでも透過する輝く光で半透明なのです。

もちろん、都には金の街路よりはるかに素晴らしいものがあります。水路と樹木（黙示録22章1、2節）、それゆえに、上には時々星を散りばめた天の綺麗な眺望を持つ美しい公園があります。確かに、素晴らしい公共の建物、同時に、聖徒すべてのための住まい、さらに、私たちの想像を絶する多くの素晴らしい事があるのです（Ⅰコリント2章9節）。

夜はない

都の巨大な建物と素晴らしい景観があるのに、一つの驚くべき欠落があるように思われます。まず驚かされるのは、古代エルサレムにおいて、さらに至福千年期のエルサレムでさえ、一つの大きな建物が都の景観と生活の両面で特に際立っていました。創造主の神殿がシオンの丘高く設置されていました。そこで祭司は奉仕し、また、人々は犠牲とささげ物を持ってきました。すべての中で最も大切なことは、創造主がご自身の民と会われた所だったのです。

しかし、今や新しいエルサレムに、創造主がご自身の民と共に住みます！　御子イエス・キリスト・・・罪のための唯一の永遠のいけにえ・・・が王座について、新しいエルサレムを治めます。そうして、贖われた聖徒たちは、みな創造主のための王であり、祭司なのです。もはや神殿の建物は必要としないのです。したがって、このような建物を巨大な都の中に探しても無駄です。それにもかかわらず、そこに神殿があるのです。

黙示録21章22節　わたしは、この都の中には神殿を見なかった。全能者にして父なる創造主と小羊とが、その神殿なのである。

地上の神殿に関する目的は、すべて完全になし終えられたので、新しいエルサレムには、物質から成る構造物としての神殿はありません。キリスト降誕前、神殿は創造主のことばを預かって伝えるところでした。キリストの十字架以降、神殿は聖霊の住みかでした。至福千年期には、神殿は記念館となります。しかし、永遠の時代には、すべての預言は成就しており、小羊の面前ではどんな記念式典も必要とはしません。内住している聖霊の証によって、三位一体の創造主の満ち満ちた人格的栄光がすべての人に行き渡り永遠に結び付きます。

天の都にさえ、地上に降りてくる前に神殿（黙示録11章19節）と祭壇（黙示録8章3節）がありました。しかし、それらの目的がひとたび達成されると、これらは永遠に取り除かれます。主・創造主・全能者ご自身が、都の神殿となります。この高く上げられた三重の肩書きは、たぶん創造主の三位一体を物語っているのです。それは絶対聖なる創造主（黙示録4章8節）に対し三回繰り返された賛辞にケルビムが用いた肩書です。また、彼らは昔いまし、今いまし、やがて来られる方（黙示録11章17節）として、永遠の過去・継続しつつある現在・終りなき未来に関わっておられる聖なる全能の創造主と認められる方に対する賛辞です。その肩書きは黙示録15章3節と19章6節で用いられており、確かに創造主の満ち満ちた状態を表明しています。

そうは言うものの、小羊はまた「都の神殿」です。限りない尊厳に満ちた創造主と受難の人間愛に富む創造主の両者は一つです。両者は創造主であり人であるものとして一つになって聖なる宮を構成し、その宮に、創造の力と買戻しの権利によって、創造主はご自身の民と永遠に住まわれます。

創造主の民―なんという身分証明でしょう！さらに，正確には、私たちは「キリストに居り」（エペソ1章3節）キリストは「栄光の望み」（コロサイ1章27節）として私たちの中にいるのですから、私たち自身は霊的に真の宮の構成要素なのです。「わたしたちは、生ける創造主の宮である。創造主がこう仰せになっている、わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをする。そして、わたしは彼らの創造主となり、彼らはわたしの民となる」（Ⅱコリント6章16節）。「創造主の家族の（私たちは）、・・組み合わされた建物の全体が成長し、・・主にある聖なる宮となるのであり、・・あなたがたもともに建てられ、御霊によって創造主のみ住まいとなるのです。」（エペソ2章19～22節）。こうして、都そのものが神殿となります。都とその居住者を「花嫁、小羊の妻」（10節）として美しく「夫のために飾られた」（2節）ものとして擬人化し整頓し、実に都そのものが宮となるのです。

黙示録21章23節　都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、創造主の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

「創造主は光であって、創造主のうちには暗いところは少しもない」（Ⅰヨハネ1章5節）のです。また、キリストご自身が「世の光」（ヨハネ9章5節）なので、都が暗くなったり夜になったりすることはどのような状況でもあり得ません。創造主はもともと光であって、「近づくことの出来ない光の中」（Ⅰテモテ6章16節）に住んでおられ、少なくとも誰も生まれながらのからだで近づくことは出来ません。同じ理由で、創造主の栄光が圧倒的輝きを持って古代の主の宮（Ⅰ列王記8章10，11節）を、また、千年期の宮（ハガイ2章7～9節、エゼキエル44章4節）を栄光で満たしたように、創造主の栄光がみなぎりあふれて新しいエルサレムを照らします。

創造主は星をちりばめたすべての天体と同様に太陽も月も世々限りなく続く（詩篇148篇3、6節、ダニエル12章3節）と約束されたのですから、太陽も月も実際になくなることは決してないのです。太陽や月の光が聖なる都を照らす必要はないというのが正しいのです。なぜなら、都自体が、周囲の地域全体に光を放っているからです（24節）。しかし、地球の反対側の地域に関しては、現在の機能を働かせ続け、それぞれ昼と夜の光として役立ちます。

もちろん、創造主が創造されたのですから、闇には本質的に何の悪いところもありません（イザヤ45章7節）。原初の創造には夕と朝、光と闇、昼と夜があり、創造主はそのすべてを「非常に良い」と言われました（創世記1章31節）。光は実に独立自存の創造主に備わった固有の性質だったので、光は創造されなくてはならない

のではなく、光はただ、組み立てられなくてはならないだけ（イザヤ45章7節）なのに、闇は実際の創造でした。創造主は、ただ「光よ。あれ。」と（創世記1章3節）言われた。すると、その後すぐ、創造された地球と原初の闇に、光が注がれ、活力が与えられた。浅薄な現代の哲学者たちは、昼と夜をつかさどる「光」の形成前に、聖書がこのように「光」について語るのは困難と考えます（創世記1章14～18節）が、地球のための創造主の光対策は、太陽と月に依存したものでないことは明らかです。これらは新しいエルサレムには全く必要ないのです。

ことばで言い表せない全能の創造主の栄光は、栄化された聖徒の身体にとってさえあまりに素晴らしく耐え難いことでしょう。したがって、都のための光は、いわば小羊・栄化された人の子を通して伝達されます。たとえ、御子の御顔が太陽のように（黙示録1章16節、10章1節）輝いていても、御子が贖っておられる人々は、御子の御前で少なくとも生き続けることができるのです。

イザヤの預言の中に、この驚くべき立場を記した美しい文があります。イザヤは都の美しい城壁と門について語っています。すなわち、「あなたは、あなたの城壁を「救い」と呼び、あなたの門を「賛美」と呼ぼう」（イザヤ60章18節）と。

それから、イザヤは栄光の都そのものを調査します。「昼は、もはや太陽があなたの光とならず、夜も月が輝いてあなたを照さず、主はとこしえにあなたの光となり、あなたの創造主はあなたの栄えとなられる。あなたの太陽は再び没せず、あなたの月はかけることがない。主がとこしえにあなたの光となり、あなたの悲しみの日が終るからである。あなたの民はことごとく正しい者となって、とこしえに地を所有する。彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ、わが栄光をあらわすものとなる（イザヤ60章19～22節口語訳）

黙示録21章24　諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

この時点で、新しいエルサレムの記述にこの予期しない啓示は、熟考と多くの異なった解釈の対象になっているのは当然です。もしユダヤ人と異邦人の贖われたすべての人が小羊の花嫁になり、新しいエルサレムが彼らの家庭なら、これら他の王たちや諸国の民とは誰でしょうか？　私たちは来るべき永遠の時代にさえ、少なくとも、そこには諸国の民がおり、彼らの王がいることを学ぶのです。さらに、彼らは、聖なる都以外の地球のこれらの部分にいる「地の王達」と関連があるようにさえ思われます。

それにもかかわらず、これらの王たちと諸国の民すべては「救われた」人々といわれており、本当に、その他すべての人は火の池に追放されてしまっているのです（黙示録20章15、21章8節）。さらに、救われたすべての人は都に大邸宅を持っています。そして、過ぎ去ったすべての時代の贖われた聖徒たちからなっています（黙示録19章7～9、20章4～6を見よ）。

しかしながら、これらの人々が、堕落前のアダムやエバのように千年期を生き抜いて肉体のまま生き続け諸国の民となる方法があるのでしょうか。地球そのものは千年期の終わりに燃え尽きます。そして、既に検討したように、その時救われるに価する信仰を持っていた人はだれでも、患難期前にキリストが再臨された時、生きていた聖徒たちのように、たちまち携挙され栄化されるはずだからです。

けれども、明らかに、聖書はこの特殊な問題を直接取り扱っていません。したがって、或程度の推測はやむをえません。確かに今の時点では試案に違いありませんが、この特殊な聖徒たちのグループは、千年期の各民族から成る幾人かで、ずっと昔のエノクやエリヤのように、肉体のまま天にあるエルサレムに移されて

いたのかも知れません。このような仮定をしたうえでのことですが、都が地上に下ってくる時、彼らはなお都の中にそのままの状態で留まっているはずです。

その場合、彼らは、新しい地球に出て行き入植し数を増やすことができます。そして、以前のように彼らの民族を再び定着させます。しかし、この時は、サタンとサタンのすべての軍勢は永遠に火の池に閉じ込められているので、千年期の背教のような悲しい歴史を繰り返すことは決してありません。子供たちは、これら救われた諸国の市民として生まれるので、彼らはみな非常によく「主の教え（イザヤ54章13節）」を受けるので、美しい都で情け深い全能の創造主に対し誰一人心にさえ反逆の思いを抱くことはありえないのです。

この解釈が、疑わしく困難を伴うとはいえ、避けられない他の問題の答えに役立つでしょう。たとえば、ノアの子孫と結んだ創造主の原初の契約が「永遠の契約」として「世々永遠にわたる」（創世記9章12、16節）との創造主の約束は、アブラハムの子孫が「天の星のように、海辺の砂のように」（創世記22章17節）増えると主が約束されているようにそのまま文字通りに取るべきです。また、「その主権は増し加わり、その平和は限りなく，・・さばきと正義によって今からとこしえまでこれを堅く立て」（イザヤ9章7節）との驚くべき救世主の約束があります。エペソ書3章21節の頌栄は「創造主に、教会に、世々にわたってキリスト・イエスにより、栄光がとこしえまでありますように」と訳すのが適切でより良い訳です。

事実、これら救われた人々からなる諸国の民が、アダムとエバに期待されたように、罪を犯さないで増え続けたならば、ご自身の栄光のために「地を満たせ」「地を従わせよ」との原初の命令は、究極的に、はじめて真の意味で成就されるはずです。このことを成し遂げるかに思われた千年期の人口増加は、背教によって終わりました。それから、おそらく、彼らは、終わりなき世界、創造主の無限の宇宙いたるところにある他

の天体に移住し発展するために送り出されるでしょう。

これはみな明らかに憶測の域を出ませんが、いくらか筋が通っているように思われます。聖書の可能な解釈として、また、全知で、愛情のある、目的のある創造主のご性質とご計画に一致した計画に相応しいと考えられるからです。これは、興味深い推測ですが、同様に、問題をはらんでおり、将来の決定に委ねなくてはなりません。

この節の最善でおそらく最もありそうな代わりの解説は、「救われた諸民族」が都の贖われた居住者と同じで、彼らの住まいが都にある上に、新しい地球に彼らの民の境界線が置かれ、その境界内で、独特の民族として目的を果たすことができるのです。確かに、新しい地球は、増加した陸地と穏やかで実り豊かな環境を持っていて、200億人くらいの居住者のために、このような地上の「外出中のホーム」によく適応できるでしょう。このような場合、イスラエル民族は、千年期の間を通じてのように、このような地上のすべての諸民族の首長になるはずです。

もちろん、地球外におけるこのような活動すべては、大いなる首都の庇護を受けて創造主の管理下に実行されるに違いありません。彼らは「闇の中を歩く」（ヨハネ8章12節）ことはなく、小羊と都の荘厳な光のうちを歩みます。民のうち一人も彼らの王でさえこのような業績を通して自分自身の誉れを求めることなく、すべての栄誉を主に帰するのです。

黙示録21章25節　都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

真珠で縁取りされた美しい門は入り口であって、関門（関所）ではありません。地上の都市の門や入り口は敵の侵入を防ぐ防壁として古代から必要でしたが、それとは違って、新しいエルサレムに敵はなく誰でも歓迎されます。「わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」（ヨハネ10章9節）と主イエスご自身が言われたように、入り口は魅力ある招待の場で、近づきにくくする嫌な妨害物ではありません。

また、古代都市の門のように日中だけ開いているのではなく、いつでも開いています。都市そのものが昼の明かりのように輝く光を放っていて、たとえ、地球自転によって都が太陽から遠ざかるときでさえ、都は決して夜にはならないのです。

夜がないことは、またすべての罪も悲しみもないことを象徴しています。前に記したように、たとえ夜の時間帯についても本質的に何も悪いことはありません。必然的結果として光がないことになり、聖書では、しばしば創造主のご臨在や祝福がないことを物語る象徴として用いられています（ヨハネ9章4節、12章35節、ロマ書14章12節、エペソ書4章11節、Ⅰテサロニケ5章2～8節、Ⅰヨハネ5章5～7節）。

新しいエルサレムには、もう夜はないし、このことはまた「死もなく、悲しみもなく、叫び、苦しみもない」（4節）ことを保証しているのです。「古いもの」は何もなく（5節）「海もない」（1節）のです。実際に、「呪いもない」（黙示録22章3節）ので、男女を問わず創造主を愛する人々の上に注がれる愛に富む創造主の満ち満ちた絶えることない祝福をこれ以上妨げるものは全く何もあり得ないのです。

黙示録21章26節　こうして、人々は諸国の民の光栄と誉れとを、そこに携えて来る。

24節で、ヨハネは地の王たちが彼らの栄光と誉れを都に携えてくるのを見ました。そして、今や、ヨハネは、また彼ら（彼らの王の例に倣って、明らかに諸国の民すべて）が、都に彼らの栄光と誉れを携えてくることを書き留めています。

創造と贖いの権利によってわれわれは創造主のものですから、「力と、富と、知恵と、勢いと、賛美」（黙示録4章11、5章12節）と共に、すべての「栄光と誉れ」は、合法的に創造主に属します。なぜなら、創造と贖いの権利によって我々は創造主のものだからです。われわれが持っていることごとくの能力、われわれが楽しんでいるすべての祝福は、創造主から来ているのです。この事実を認識している人は依然として僅かです。金持ちは富を誇り、教育を受けた人は知的追及を誇り、力ある人は自分の権力を大いに楽しむ、貴族は平民をさげすむ、創造主はこのような人の誇りをみな憎まれます。「主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」（エレミヤ書9章23、24節）。

最終的に、諸国の民と彼らの王たちは、最後にこの重要な真理を学び取ります。人の理解と物的供給源があいまって、今までとは比較にならないほど研究が大いに進み発展し、地はその富をもたらします。当然の結果として、これらのことを遂行した人々や諸国の民に多くの栄光と誉れが齎されるはずです。しかし、この「地を従わせる、」とは創造主の栄光のためにする管理者としての人の職責です。そこで、都には絶ず行列

が続くことでしょう。都では小さいものも大きいものもすべての人が、賞賛を受けるに値する唯一の方の足下に彼等の学識と富のトロフィーをまた栄光と誉れを置きます。

黙示録21章27節　しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行う者は、決して都にはいれない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。

常に開かれた都の門を通って自由に出入するにもかかわらず、また無制限に出入りする権利をどんなに働かせても危険はないとヨハネはもう一度強調しています。都の健全さはどのような穢れた思考または不純な動機の侵入によっても汚される可能性はありません。そこを行き交う人は、すべて創造主の御子のみ姿に合わせられ（ロマ書8章29節）、御子が清いように自分自身を清くして（Ⅰヨハネ3章3節）すでに長い時が経っています。

憎むべきことを行う者すべて、その意味は特に心のうちで偶像を拝み育てるもので、これには信じないものと貪欲なもの、偽りを言うすべてのものが含まれます。人を欺く彼らの偽りの心は偽りの父で遥かかなたの火の池に追放されたサタンによって支配されており、そこから永遠に逃れられず、したがってこれらの人々が都に入る方法はありません。

事実、小羊のいのちの書に名が書き留められていなかったすべての者は火の池に投げ込まれており（黙示録20章15節）、したがって、憎むべきことを行うものは誰も真珠の門に近づくことさえ出来ないのです。恐ろしい火の池を隠し持っている大いに奥まった地域を除いて、真珠の門がある都と新しい地球、さらに創造主のすばらしい宇宙は、小羊によって贖われ小羊のいのちの書に名の記されたものだけが専ら利用し楽しむた

めにあるのです。

私たちのゴールである天の御国（天国）は、新しいエルサレムに住む人々によって管理される広大な御国であり、わたしたちは王として永遠に主に仕えることになります。

この世を去るとき、人々は二つのグループに分けられます。地上にて罪の問題が解決された人々（すなわち、主イエス・キリストを自分の身代わりに罪を解決してくださった主として受け入れた人）は、パラダイスでしばし憩いの時を持つことでしょう。キリストの再臨に当たって、彼らの身体は甦り、生きている私たちの身体は瞬く間に変えられ携挙され、キリストと共にいることになります。一方、主を受け入れていなかった人々の霊は黄泉（陰府）に置かれます。やがて、世の終わりが近づくと、地上には争いが絶えなくなり、大患難期に引き継がれ、ついで至福千年期となり、その後天地は消え去り、キリストの裁きの座が現れます。ここで生を受けたすべての者の霊は各自の身体とあわせられた上で、裁の座に立ちます。小羊のいのちの書に名の無い者はすべてサタンとその使いのために用意された永遠の火と硫黄の燃える池（地獄）に投げ込まれます。こうして、新しい天と地が出現し、その都である新しいエルサレムが私たちの住処となるのです。こうして、天の御国（天国）はスタートします。